

報 告

ビアトリス・ポッター・ウェッブ「経済科学の本性について」の紹介と翻訳

佐藤公俊¹

¹一般教育科—社会科 (Liberal Arts-Social Sciences, Nagaoka National College of Technology)

On Beatrice Potter Webb's "On the Nature of Economic Science":
Its Introduction and Translation

Kimitoshi SATOH¹

Abstract

Beatrice Potter Webb wrote a note "On the Nature of Economic Science", in Appendix of *MY APPRENTICESHIP*, that is Part I of her autobiography and published in 1926. She had condensed and integrated to the note from two previous economic articles, one written in 1886, named latterly "The History of English Economics", and another written in 1887, named latterly "Economic Theory of Karl Marx". According to "On the Nature of Economic Science" she assumed to extend her research to not only Market Economy but to Welfare Economy and other Economies of Society, and criticized the classical political economy and Marxian economics as not being realistic by the historical method which has been originated from the sociological and institutional way in her two previous economic articles.

Key Words: *Beatrice Potter Webb, MY APPRENTICESHIP, "On the Nature of Economic Science", "The History of English Economics", "Economic Theory of Karl Marx", historical method, Welfare Economy*

1. 社会科学、経済学における意義と概要

本稿で紹介し、翻訳するビアトリス・ウェッブの「経済科学の本性について」は、1880年代半ばに書いた自身の二つの論考を1920年代半ばにまとめたものである。1880年代の論考は、おそらく経済学研究史上初めて、福祉経済領域及びその他の社会経済領域を設定し、そこへの歴史的方法と制度的方法を適用するというアイデアを示したと評価できるものである。それらのアイデアと経済科学批判を示す部分は、4節に掲載する「本性」論文の翻訳文の下線部①-⑩である。それらの概要は以下の通りである。
①政治経済学のように、生産と消費を一緒にし、社会進化の段階を一緒にし、様々な社会組織を一緒にすることには利点がなく、人間行動の研究、社会制度の

研究、社会学が必要である。

②、②* 政治経済学は混乱状態から通商の原理を分離して単純化している。

③政治経済学は大企業だけが富を生産する唯一の形態ではないことを無視する。

④富の生産は多くの社会制度によって行われることを政治経済学はあつかわない。

⑤政治経済学も経済学も経済科学は領域と推論方法を誤っている。

⑥ビジネス組織と他の社会組織の併存状況が分析対象である。

⑦経済科学の抽象的方法演繹の方法は弊害をもたらす。

⑧社会制度の維持には他の社会制度の補完が必要である。

⑨economic という言葉を生活の経済学と貨幣の経済学にとっておける。

⑩制度主義と社会制度の生成発展没落論を提起する。

2. ビアトリスの「修業時代」

イギリスの社会改革家として、社会経済学者として、シドニー・ウェブ夫人としても有名な、ビアトリス・ポッターは（結婚後はビアトリス・ポッター・ウェブ）1858年1月22日グロスターシャーのグロスターにおいて裕福な資産家の家庭に生まれた。なくなったのは1943年4月30日リフック（Liphook）である。

ビアトリスは小さい頃は病弱で、少女時代から社会貢献と自己の生活の欲求という二つの心の分裂に悩んでいた。いわば社会貢献と生活の欲求とを分つ楯の上を、どちらかに落ち込まぬように危うい均衡を保って歩むような状態であったのであろう。社会貢献と欲求との対立は「修業時代」のライトモチーフと言え、それは能力と欲望との結合及び労働組合と消費組合の結合という形で、今回紹介する1926年のノートの第2部の重要な観点となっている。

ビアトリスは、少女の時から当時の有力な哲学者ハーバード・スペンサーの親身の教えを受け、十九歳のとき彼に師事して社会哲学を学んだ。彼女は父の仕事の補佐と家族の世話に忙殺されながらも、社会問題の調査に励んだ。彼女は、農夫の娘として労働者階級の実生活の経験をするなど、現実社会を実践的に勉強したのである。

急進的な政治家ジョセフ・チェンバレンとの恋は失恋に終わったが、ビアトリスはロンドンでオクタビア・ヒルの慈善組織協会COSに参加し、慈善的住居援助計画の仕事に携わり、貧困の救済について多くを学んだ。そこでの経験をもとに貧窮者の生活について論文を書いた。それが従姉妹のメリーの夫で当時社会調査家として著名なチャールズ・ブースから注目された。チェンバレンとの交際での議論では、政治経済学や政策知識の不足を自覚していたが、ビアトリスはブースと親しく話をし、彼の学識を知って、自分の社会についての知識不足を認識した。

チェンバレンとの関係の破局のあと実家の女主人として病気の父の面倒を見ていたけれども、1886年から1887年にかけて、ビアトリスは意気消沈していた。その時期は彼女の経歴の支点／転換点“Death Point of My Career”¹⁾であったが、自分の天職“my vocation”¹⁾の発見と自覚により低迷した意

識の状態から回復したのである。彼女はこの期間に社会科学を勉強して、イギリス経済学史とマルクス経済学の価値論批判との二つの経済学論文を書いた。これらは残念ながら、完成度の問題などの諸事情で出版されなかったが、経済学研究史上で初めて、福祉経済領域、その他の社会経済領域を設定し、そこへ歴史的方法と制度的方法を適用するというアイデアを示したと評価できるものである。

ビアトリスは経済学の勉強を開始して会得した「私自身の小さなこと」¹⁾を上二つの論文で表現したが、それは理論経済学だけでは貧困をなくすことができないという確信に至るものであった。そうして自分の進むべき仕事を自覚したのである。社会調査と貧困問題解決の研究である。これは、社会調査による貧困の状態の把握という知的欲求の充足と、貧困問題の解決という社会貢献との一貫した結合と見ることができる。こうして、ビアトリスは、貧困問題の対策と調査という仕事の自覚によって、「二つの心」の調和を見いだしたいって良いであろう。

その後ビアトリスは社会問題、貧困問題についての調査論文を書き雑誌に掲載された。こうして1890年頃までには、ビアトリスはと自立した調査の専門家として認められて、社会調査研究家として自分の職業生活を確立して開始したのである。

調査研究活動において社会問題の調査と貧困問題の研究会で、ビアトリスはシドニー・ウェブと出会い、紆余曲折をへて結婚した。バーナード・ショウらとともにフェビアン協会の指導的存在となった二人のウェブは、現在のロンドン大学経済学部当たるロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（ロンドン経済学院）を創設し、イギリスの労働党や社会民主主義運動に大きな影響を与え、活発な調査・研究・著作活動から社会福祉学の分野でも大きな成果を上げたのである。

3. 二つの経済学論文が書かれた背景

「修業時代」で見たように、ビアトリスは、政治経済学や政策知識の不足を自覚し、自分の社会についての知識不足を認識していた。彼女は、失恋の痛みから逃れるためではあったが、これらの学習を含めた知的な作業をすることを通じて、自分の天職“my vocation”を発見して自分の進む道を見いだした。繰り返していえば、社会調査による貧困の状態の把握という知的欲求の充足と、貧困問題の解決という社会貢献との一貫した結合である。それによ

り、低迷した意識の状態から回復したのである。

ビアトリスが経済学の研究の結果として抱いた「私自身の小さなこと」を表現して書いた論文は、〈イギリス経済学史〉と〈マルクス経済学の価値論批判〉についての二本の経済学論文である。それらは、当時の政治経済学や経済学の領域論を批判して新たな領域を提起し、またそれらの非歴史的方法と非実証主義的方法の非現実性を批判して歴史的方法の基礎を提起するものである。

G. D. H. コールは “BEATRICE WEBB AS AN ECONOMIST”²⁾ でビアトリスの二つの経済学論文が書かれたときの雰囲気を書いている。

「その当時、社会主義はイギリスでは長い眠りから覚めたばかりであって、活発な論争が、主にミルとジェヴォンズの学派に従う古典派経済学の支持者と、この国では主にマルクスの著作の非常に単純化された要約と解説とによって今だなお知られている、マルクス主義の支持者との間で激しく繰り広げられていた。マーシャルの新古典派経済学は生まれたばかりであった。オーストリア学派はほとんど知られていなかった。そしてマルクシズムの学徒のほとんどは、『資本論』の中で唯一英語版で読めた第1巻の冒頭の数章を読んだだけで立ち止まっていた。フェビアンたちは、マルクスというよりもジェヴォンズから導き出すこととなった、彼ら自身の社会主義版功利主義経済学説をまだ形成していなかった。彼らはこの新たな定式化にゆっくり向かう途上にいると感じていたし、バーナード・ショウは特に、P. H. ウィックスティードとの有名な論争にあったとき、マルクス主義の巨大な呪縛のもとにあったのである。」²⁾

ビアトリスのこれらの二つの経済学論文は、ロンドン大学図書館のアーカイブズの資料集の一つであるパスフィールドコレクションの中に、手書き原稿の形で保存されている。My Apprenticeship の叙述に基づき「イギリス経済学の歴史」”The History of English Economics” と名づけられた1886年の原稿³⁾と、同じく「カール・マルクスの経済理論」”The Economic Theory of Karl Marx”と名づけられた1887年の原稿とその写し⁴⁾である。ビアトリスは、「経済科学の本性について」として1926年のMy Apprenticeship の付録に収録した際、これら二つの経済学論文の内容を要約して一本にまとめ、書き直して、1886年というよりも、40年後の1926年当時の思想状況に対応するものとしているようである。「経済科学の本性について」は、それぞれ対応する「イギリス経済学の歴史」と「カール・マルクスの

経済理論」を縮約し改訂した、〈第1部：自己充足して、独立して、抽象的な政治経済学への私の反対論〉、および〈第2部：価値の理論〉、との二部構成になっている。ビアトリスはこの論文に付した注意書きで、「以下の『経済科学の本性について』および『価値論について』のノートは、本書p. 282で言及した私の論文で不完全なかたちで示された議論を、要約すると同時に拡張したものである。」¹⁾と記している。この全文の翻訳を以下の4節に掲載する。

4. My Apprenticeshipの付録に収録された「経済科学の本性について」の翻訳

*から**までの間の付録(D)以下が、ビアトリスのMy Apprenticeship に付録の一つとして収録された「経済科学の本性について」の翻訳である。なお、①、②などの番号をつけた下線は、1節で概要を示した彼女の方法的な見解の部分を示すため、訳者が付したものである。

*

付録(D)

経済科学の本性について

- (1) 自己充足して、独立して、抽象的な政治経済学への私の反対論

①富の生産と消費に関する全ての活動をまとめて一緒に集めること、社会進化の様々な段階を一緒にすること、また社会の機能を実行するさまざまな種類の社会組織を一緒にすること、これらのことには私はほとんど利点をみず、多くの不都合な点を見いだす。そして、社会における人間行動の研究、すなわち社会制度の研究、あるいは社会学、これらと掛け離れて、上述の対象あるいは目的を政治経済学と呼ばれる一つの自足的科学の主題となすことにも、私はほとんど利点をみず、多くの不都合な点を見いだすのである。正統的ないしリカード派経済学がこうした一般的な富の生産の科学をなすという、暗黙の主張はすでに対抗する権威から攻撃されている。頭脳明晰で独創的な思想家であるウォルター・バジヨットは以下のようにまとめている。「②政治経済学という科学は、大規模に生産的で通商的な社会におけるようなビジネスの科学と定義されるかもしれない

い。それは、多くのイングランド人にとってなじみ深いかの世界—イングランドを富裕にした『大通商』—の分析である。②*それは、上の通商を可能にする原理的事実を想定して、また、ある抽象科学の方法のように、これらの原理を分離して単純化する。つまり、実際にそれらの原理を混ぜ合わせている混乱状態からその原理を分離するのである。」[『経済研究』、ウォルター・バジョット、1888年、p.5] バジョットは、経済学徒が忘れがちなことを心中に抱いていた。すなわち、③リカードが考察していた19世紀型の「大企業」が、富の生産の唯一の形態ではないということである。そして、実際、「大企業」は、家産奴隷制度、部族所有、小農経営、荘園制度、独立手工業、家内制製造業、その他もろもろの他の諸形態と著しい対照をなすのである。今日でさえも、利潤追求的な資本家的企業の他に、世界には他の社会制度が存在し、それは言葉のもっとも狭い意味においてさえも、少なからざる量の「富」を生産しているのである。例えば、20世紀においては、国有林と国有鉱山、銀行と郵便局、蒸気船航路と鉄道がある。そして、都市のガスと電気部門、路面電車とドック、住居とレストランがある。利潤形成の動機を持たずに運営される様々な産業企業を有する、消費者協同組合運動を再び取り上げるまでもない。かくして、リカード派経済学は一もしその妥当性についてバジョットの正当化についての判断に権威があるならば—富の生産の科学を称する立場にない。④政治経済学は、研究され教えられる時、富の生産に取り組むまたは関わる多くの社会制度のうちの一つだけ扱っている。そして、『ビッグビジネス』または利潤形成的な資本主義など知らぬ何億もの人々間で富を生産してきたし、また今も生産している、他の社会制度を無視するのは誤りである。『ビッグビジネス』または利潤形成的な資本主義についてリカードは、彼の後継者たちが、過去一世紀に渡って、かくも精出して巧妙かつ精緻にしてきた、『法則』を定式化しようと求めたのである。

なぜきっぱりと、政治経済学という科学のすべての概念を捨て去らないのか。⑤その呼び名(Political Economy)自体は愚かなものである。つまり、それは政治的ということとコミュニティの産業組織と混同しているのである。経済学(Economics)という現代的な呼び方が取って代わったときでさえも、その「科学」は誤った内容の領域と不完全な推論方法とを引き継いでいるのである。研究される必要があるのは、それに関わる男性と女性と帰属する動機がどんなものであろうとも、また、

これらの制度が設立されたり維持される目的ないし目標と考えられるものがどんなものであろうとも、それらが実際に存在しているような、または存在してきたような、社会制度それ自体である。『ビッグビジネス』または利潤形成的な資本主義の組織は、現在において、最も重要な社会制度の一つである。そして、それはそれ自身の全体的研究に値するのであって、それは科学の名を保証するかもしれないし、まだ保証しないかもしれないが、しかしこの組織についての適切な叙述が見いだされなければならないのである。⑥利潤形成的な資本主義ないし現代のビジネス組織についてのこうした研究は、他の社会組織についての個別研究とともになされるであろう。他の社会組織とは、家族、消費者組合、様々な種類の生産者の職業組織、地方政府、国家(ないし政治組織)、国際関係、人間の知的/美的/宗教的関心、そしておそらく、社会学としてのみ扱うことのできる(そして何時の日か社会学に統合されるかもしれない)他の多くの諸部門である。

そして、今経済学ないし政治経済学と呼ばれるもの—HearnがPlutologyと呼びたがっていたことが思い起こされるかもしれないが—その定義ないし領域のこうした変化は、真理の発展に役立つばかりか、今日利潤形成的資本主義の利益ともなるであろう。それはほとんど必然的に、その推論の厳密な検証の可能性もなしに、⑦リカードの権威がイギリス経済学の後継世代に押し付けていた、抽象的ないし純粋な演繹法の放棄を意味するであろう。今や、抽象的かつ演繹的方法の多くの有害な結果の一つは、その演繹的推論の前提として使われている仮定、つまり金銭的自己利益が、事実上、現代の実業企業の基礎であり、その他の全てが単なる「摩擦」として無視される、という基礎的仮定であった。かくして、利潤形成者の全ての活動が、ただもっぱら金銭的自己利益によって引き起こされる、と考えられてしまうのである。これは、私の考えでは、彼らに対する不当な扱いである。公共精神と個人的虚栄心、技術的効率性の喜びと権力への欲望、政治的および社会的野望、冒険精神と科学的好奇心、親の愛と家族の誇りについてはいわないとして、そして人種的名声さえ、これらは全て実業界の支配的なパーソナリティの形成に貢献しているのである。競争的な利潤形成ないし資本主義が強欲と圧迫を促進し、公共精神を抑圧するかどうか—国家の雇用がたるみを助長して積極性を減じるという、そして、職業組織が排他性と古い技術とを助長するという、告発と同じように—これらは全て探求されるべき問題のようである。

「それらの果実で汝はそれらを知るであろう」—この言葉に私が付け加えたいのは、より特別には精神的な果実によってということである。即ち、なんらかの特定の制度が個人及びコミュニティにもたらす心の特徴によってである。つまり、この制度が、個人と組織の行動の中に現すことで、生成する性格である。我々にとってここには最も探求の成果が上がるフィールドがある、と私は信じている。⑧それぞれの型の組織（あるいは組織の不在）、それぞれの社会制度、にはそれぞれ特有の「社会的病弊」があり、もし進行が食い止められなければ—おそらく、他の補完的な社会制度の存在あるいは発展によって食い止められなければ—それは老衰ないし死に至る、ということを我々は見出しうるだろう。

⑨政治経済学ないし経済学という分離された抽象的な科学の概念を我々が放棄すると考えると、そのとき「経済（学）的」という形容詞は、生活手段ないし生存手段から生じる人間の関係を定義するのにとっておけるであろう。あるいは—これらの関係が生じる社会制度がいかなるものであろうとも—貨幣のタームで測ることが、そして尺度ができるという、もう一つの方法で使用するためにとっておけるであろう。正しく、人種的、政治的、法的、スポーツのあるいは性的という言葉を使って、我々が他の対象ないし目的を持つ関係の類型を記述するように、である。かくして、ちょうど我々が事情次第で、実業企業や家族や市当局の法的側面を見るように、我々は芸術の経済学、スポーツの経済学、結婚の経済学または薬の経済学を持つべきである、ということになるのである。

こうした⑩新たな分類方法の必然的な含意は次のようになるだろう。つまり、探求され、記述されそして分析されるべきことは、存在しているかまたは存在していた、社会制度それ自体であり、重力の法則になぞらえられるような、不変かつ普遍的で、事実との不一致が摩擦として捨て去られるような、なんらかの想定された「法則」、ではないのである。第二の系論は、以下のものである。つまり、これらの社会制度は、他の有機的構造と同様に、研究されなければならないが、それは想定された発展の完成形としてあるのではなくて、成長する社会組織の全ての変化の相にあるのである。即ち、胎児から死体まで、健康であり異常である、端的には、現実の社会関係の誕生、成長、病気そして死として、全ての変化の相にあるのである。そしてここでの病気は研究の最も興味をわく部分でさえありうるであろう。

この新たな出発によって得られる利点の幾つかを

探査してみよう。例えば、我々の大きな町の中での、とりわけドックゲイトにおける、墮落した労働の蓄積に直面してしまえば、正統派経済学者たちの機械的な学説は無駄な言葉である。「労働は一番良く支払われるところに向かう」という、いわゆる「経済法則」は、全ての人間が金銭的自己利益に従うという形而上学的理論からもたらされる、たくさんの演繹的推論の一つだが、ここでは出来事によって迷わず誤りを証明されるのである。この場合の労働は最もひどく支払われる場所に向かい、そしてそこに留まるのである。我々は、この出来事の状態をもたらす道筋を発見できるのか。日雇い労働者の階級を全体として取りあげてみると、彼らの経済能力はまだらであるし、また、これらの個人の大多数が、ずっと続く仕事に対して常に精神的ないし肉体的にむいていなかったか、あるいはそうなってきた、ということを我々は観て取る。通常の賃金で着実に継続的な仕事に慣れた田舎者が、所与の条件下で、不完全就業者となり、また結局は雇用不適格な労働者となってしまう過程を、我々を見ることさえできる。大きな町の魅力は明白である。配給に関する職業は、また建設業は、製造業または鉱山業よりもより片手間の仕事やより短期の仕事を提供する。大都会の生活は、田舎のあるいは製造業の町の生活よりも、ずっと大きな娯楽を手のあいている時間に対してもたらずのである。こうした特別な有閑階級の存在は、通常の仕事で生活することの難しさと、それなしで生活することの容易さという、一見したところ逆説的な言説にまとめることができよう。そして、生まれかまたは気質かのいずれかによって、この日雇い労働者階級に属するか、あるいは環境によってこの日雇い労働者階級に移動した人々が、彼らの状態に大きな不満を抱いているかということ、私には疑わしい。なぜなら、彼らの経済的欲望は、無力であるのはともかくとして、最低水準の主観的性質に沈み込んでいるからである。身体的な苦痛にも関わらず、彼らは単調な状況下での比較的安楽な労働生活よりも、大きな町の低俗な刺激のまったただ中の有閑的生活を選ぶのである。彼らは、道徳慣習に束縛されない、また小さなコミュニティの公共的な意見に制約されない—しかし（「良き社会」の同じような階級の社会生活とは異なり）温かい心で寛大な最も純粋な精神によって鼓舞される—社交を心ゆくまで楽しむのである。彼らは、知的なまた倫理的な偏見から自由な、有閑的でコスモポリタンな生活観の全ての魅力を持つ、魅惑的な人々である。そして彼らは、「ロンドン社交界」の有閑階級に属する個々人がロ

ンドンの専門家の階級及び、我々の地方の町における中の上の階級と違っているのと同じように、真の労働者階級と違っているのである。しかし彼らは本質的に寄生的であって、他の寄生的な発生物と同じように、彼ら自身の健康状態のために餌としている物を減らす傾向がある（注3）。

以上をまとめよう。使用していない経済的能力は急激に劣化して一時停止状態となる—そして効率的な経済的欲望は、生産の義務がなくて満足させられると、急速に寄生的になる—これは私が、リカードとマーシャルとの抽象的な経済学からは到達しえなかった結論なのである。

注3：最下層の日雇い労働者階級の行動についてのより詳細な叙述は、「ドック」についての私のその後の論文に載っている。

「これらの男たちは「半端時間」の仕事のために、ないし7日のうち1日はうろつく。彼らは、パンと紅茶及び塩漬け魚によって変わるが、アルコール飲料とタバコで生きている。彼らの情熱はギャンブルに注がれている。彼らの一部は代々日雇いであり、より多くの部分は他の職業から流れ込んできた。彼らは生まれながらに規則性や深慮を憎んでおり、つまらない刺激を必要とする。彼らは朝寝坊で、気の利いた話し手であり、とりわけ、彼らは、社会の天辺にあるか底辺にあるかに関わらず、純粹に有閑階級に特徴と思われるような、彼ら自身のそしてお互いの悪徳に対する快い寛容さを有している。しかし、もし我々が彼らを、ロンドンのクラブとウェストエンドの応接間の兄弟や姉妹と比べるならば、一面では明らかに彼らがすぐれていることを認めなければならない。常に差し迫る厳しい現実がもてるもの全てを引き出すのである。共産主義が彼らの生活に必須である。彼らは全てをたがいに共有する。そして階級として彼らはドンキホーテ式に寛大である。彼らが欠乏に直面する際のこうした徳性と勇氣こそが、彼らの間の生活に魅力を加えるのである。」

(Charles Booth, *Life and Labour of the People*, Final Edition (1902), Poverty Series, vol.4, Chapter on The Docks, by Beatrice Potter, pp.31-2)

イーストロンドンの上着縫製業における低賃金、長時間かつ不規則な労働、そして不衛生な状態についての私の次の研究（1888年公刊）は、一方での低い型の経済能力と、他方での貧乏に打ちひしがれた経済的欲望との間と同じ様な対応を暴露した。それ

は、着ていて不経済であるのと同じようにひどい見かけの商品である、「バルーンコート」と「石鹸で洗いざらしたズボン」との生産と使用に帰着したのである。上着縫製業の醜い子孫とともに、低い能力と低俗な欲望とのこの特別に不名誉な対応関係と対極にあるものとして、中世の大聖堂を振り返ってみよう。この大聖堂は、敬虔な創設者から代々の方、および、当時の忠実な信者の会衆である疑うことのないコミュニティの方での、神の家への有効な欲望と、個々人が手工芸を達成するのに熱中しているような、職人の一団を率いる、神に心酔した無名の設計者の能力とが、結びついた結果である。苦汗作業場と対比される現代的でより複雑なものとして、米国ビジネスの企業連合の科学的で効率的な工場を思い浮かべることができる。この工場は、高額な報酬を支払われる熟練者によって組織され、良い賃金で、比較的短い時間の労働で、衛生的な状態で、また、大量の注意深く序列化された被用者に対する「福祉」制度—階層的な規律と恣意的な昇進と解雇、極端に細分化された分業において終わりなく繰り返される労働という単調さを伴う—ということは事実だが—を持った、定常的な雇用を提供していて、立派な品質で疑う余地のなく効用のある膨大な量の標準化された商品を生産している。それらの商品は、「箱入り食料」、蓄音機、自動車または軍需品のいずれにせよ、全て、主に、自己保存の動物的本能や、共通の快樂への欲望、そして権力へのどん欲さをただ満足させるために正確に設計されているのである。

特定の個人と階級の経済的行動の研究として、彼の経済学の概念化を、私が追求していた際の熱意によって、私は、ロンドンのイーストエンドの労働条件下で、賃金稼得者の、商品の生産と消費におけるのと同様に、かれらの漸進的悪化についてのルールの一つの顕著な例外を発見した。（1889年に刊行された）チャールズ・ブースの研究の第一巻に寄稿した、イーストエンドの縫製業についての章と、ユダヤ人コミュニティについての章で、私は以下のように移入民のユダヤ人の例外的な性格を描いた。

「イーストエンドの縫製業において、ユダヤ民族の特徴的な利潤への愛は、個人としての労働者を高め、労働者が出世の手段とする産業を抑圧するという、二重の傾向を持つ。請負人も労働者も同じように社会的階級を上って行く。つまり、彼らは全体として上方に移動し、外国から来た新参者に、最低限の賃金の労働と、最悪に荒廃した作業場と、最も汚い宿泊場所を残して行くのである。」（注4）

注4 : Charles Booth, *Life and Labour of the People*, Final Edition (1902), Poverty Series, vol.4, Chapter on The Tailoring Trade, by Beatrice Potter, p61 参照。

「[私が、同じ巻の次の私の章、ユダヤ人コミュニティについてで、書くように] 産業的な競争者として、ポーランド系ユダヤ人は決められた生活水準に囚われていない。つまり、それは彼らの機会とともに上がったり下がったりするのである。彼らは貧乏に押しつぶされず、また、収入で非倫理的になることもない。我々の多面的な大都会の市民として、酒浸りや犯罪につながる情熱の嵐に突き動かされることはない。他方で、彼らは、我々のより複雑でまた訓練されていない本性の満足されない情動から生じる、ユーモアと幻影及び熱望に気を引かれることはなく、個人的存在の主要目的を追求するのではあるが。それゆえ、驚くべきことに、この19世紀において、肉体的健康と知的な発展及び物質的繁栄という理想を持って、選ばれた人々が、3000年の修練を持って、ある例において、モーゼが彼らの父祖にした約束を実現すべきなのである。『そなたはそなたよりも強力な民族を追い出すであろう、そしてそなたは彼らの土地を遺産として取るであろう。』」(注5)

注5 : Charles Booth, Final Edition (1902), Poverty Series, vol.3, Chapter on The Jewish Community East London, by Beatrice Potter, reprinted in *Problems of Modern Industry*, by S. and B. Webb (1898), pp.43-4.

様々な型の経済行動の研究として経済学を概念化することから生じる一連の考えは、S. and B. Webb, *Industrial Democracy* (1897), pp.697-8 のノートに示されている。すなわち、

「我々ここでは、生活水準としてのこれらの有名な考えの存在に言及する以上のことはできない。如何にそれらが創成してきたか一例えば、何故、英国の労働者が費用がかかって栄養のない小麦パンを食べることを常に主張すべきであったかは、あるいは何故、ある階級ないし人種が他のものよりも頑固に標準へのこだわりを示すかは、経済研究にとって実り多い研究対象であろう。我々は、出発点からの途中で仮設的分類として、賃金稼得者の人種と階級とは三つのグループに分かれると考える。アングロ-サクソンの熟練職人のように、慣習的な最低限の生活水準以下では働こうとせず、最大限の生活水準のない様な人々がいる。アフリカ系の黒人のように、指定しうる最小限の

生活水準がなく、非常に低い最大限の生活水準を有する人種がいる。最後に、我々が考えるように、唯一最大限も最小限も持たないユダヤ人がある。彼らは雇用から外れたままであるよりもむしろ最低限の条件を受け入れる。彼らが世界を上がるにつれ、新たな欲求に刺激されて彼らはよりいっその努力をするのであって、いかなる大きさの所得も彼の飽くなき活動を緩めることはない。生活水準のこうした著しい柔軟性について、我々はユダヤ人の富裕層と貧困層の両方に当てはまると考えるが一明らかな事実は、個々のユダヤ人はそれぞれの国において最も富裕な人々ではある一方で、ユダヤ人の賃金稼得階級は永久に全ヨーロッパで最も貧困であるということである。」

(2) 価値の理論

価値の理論を私が抱え込んでじっくり考えると、能力を実行することで欲望を満足させることから価値が生ずる、という考え方にいたる。「使用価値」において、実行と満足とのこの結合は、一人の人が自分で生産する食料を食べる際に、一箇の個人において生じるであろう。「交換価値」においては、この結合は必然的に二人以上の個人間の関係を意味するのである。

価格は、所与の能力と所与の欲望とが、所与の条件下で、結合することに同意して交換価値を発生させるときの等式の、貨幣タームでの単なる表現である。それは、いわば、経済生活の結婚的解決であり、多くの他の結婚の取り決めのように、常に、当事者双方の利益となるわけではない。そして更に、この涙の谷間では多くの能力と多くの欲望とが、事実の問題として、結婚・結合しないまま残っており、かくして交換価値を発生させることはないのである。実際、人類の経済的能力と経済的欲望との常に増大する結婚・結合の流れにおいて、間断のない連続性と相互の満足とを成し遂げる最大の手段をもたらすことが、応用社会学の主要課題の一つでなければならないのである。

今、カール・マルクスと彼の学徒は、トンプソンやホジスキンのカードに従って、第三のもの(交換価値)を作り出すのに第二のもの(欲望)を用いるのを認めることを拒否した。彼の価値の理論に従うと、経済能力、あるいは、彼が好んでいうように、「労働」、は価値の単一の源泉である。彼は、経済的欲望が、エーテルのように、いつでも存在し、それゆえに価値の共通の親としては無視されうると考

えたのである。(注6)したがって、彼は、特定の能力と特定の欲望との一致ないし結合を実際に達成する、全ての過程を見逃してしまったのである。マルクスを読むと、人は、結構な剰余とともに、生産の費用に等しい交換価値を形成するために、一ヤードの布を織ることだけが必要と考えるであろう。不気味なマルクスの世界では、人々が機械人形である一方で、商品は魂を持ち、貨幣は生命を吹き込まれ、資本は自分自身の生活過程を有するのである。かくして、満たされるべき何らかの欲望の存在を意識することさえせずに、利潤を形成している「機械人形の所有者」というこの考えは、金融的なまたは産業的に事業に携わって生活しているどんな人にとっても、事実との明白な食い違いの点で、グロテスク以外の何ものでもないのである。

注6：それゆえに、等量の労働が体化されているような、あるいは同じ時間で生産できる商品は同じ価値を持つ。一方の商品の生産に必要な労働時間が他方の商品の生産に必要な労働時間に一致する場合、一方の価値は他方の価値に一致する。「価値として、全ての商品は一定の大きさの凝固した労働時間にすぎない。」．．．（*Capital*, by Karl Marx: translation edited by Friedrich Engels, 1887, vol. 1, p.6）。

消費者協同組合運動に関しては、経済的能力と経済的欲望との一致ないし結合から交換価値が帰結するという私の考え方によってこそ、そのときの新しいアイデアであって、そして、今広く受け入れられて真のアイデアであると証明されたものへの手がかりか与えられたのである。それは即ち、イギリスの協同組合運動の成功が依拠している事実、この運動が、本質的に、消費者の組織であって、消費者の利害で商品の生産と配分とを制御しているということである。それは、今までのところ運動の理想主義者によってばかりでなく、政治経済学者によっても主張されてきたような、生産用具を所有して自分自身の雇用を制御しようとする生産者の組織ではないのである。更に、この消費者の組織は、それ自体、産業活動の健全な組織をもたらすものでない、と私には思えた。内部の混乱と退化からそれを救うには、様々な生産者階級の代表者が制御に何らかのかたちで参加することが必要である。つまり、実際に、肉体労働者の労働組合は、頭脳労働者の専門家組織とともに、それらが現在でもまた政治国家とその派生物—自治体政府—に必要な補完物であるよう

に、消費者の協同組合運動に必要な補完物であったのである。

消費者と生産者との協同作業としての民主的な産業政府というこのアイデアが、経済的能力と経済的欲望との一致ないし結合とから交換価値が帰結するというアイデアと何らかの類似性を持つ、と考えるのは空想的なことだっただろうか。「労働組合と協同組合との適切な関係は[私はこのように、1892年に、労働組合の役員と協同組合員に話す]理想的な結婚の関係である。そこでは、双方とも共通の目的—協同組合国家—を確立するために、心から力を合わせるのであるが、各パートナーは個性を尊重して、相手の仕事を助けるのである。」（注7）

注7：Tynemouthの労働組合の役員と協同組合員との会議で読まれた文書。1892年8月15日。S. and B. Webb, *Problem of Modern Industry*, 1898, p.208に再録された。

* *

以上が、Beatrice Webb, "On the Nature of Economic Science"の翻訳である。

謝辞：この研究は、「19世紀経済学におけるジェンダー意識」（課題番号19510280）研究の一環であり、平成19年度科学研究費補助金の支援を受けたものであることを記して、感謝いたします。

引用文献

- 1) Beatrice Webb, *On the Nature of Economic Science*, ((1) My Objections to a Self-contained, Separate, Abstract Political Economy and (2) A Theory of Value), in Beatrice Webb, *My Apprenticeship*, as Appendix D, pp.422-430, Longmans and Green Company, 1926.
- 2) G.D.H.Cole, BEATRICE WEBB AS AN ECONOMIST, in *THE WEBBS AND THEIR WORK*, edited by MARGARET COLE, FREDERICK MULLER LTD, 1949.
- 3) Beatrice Webb, *The History of English Economics*, PASSFIELD Collection, 7/1/3, 1886.
- 4) Beatrice Webb, *The Economic Theory of Karl Marx*, PASSFIELD Collection, 7/1/5, 1887.

(2008. 1. 21 受付)